



## 第1回色彩工学コンファレンス報告

佐柳 和 男

キヤノン(株)中央研究所 〒243 厚木市森の里宮 5

先回まで29回の歴史をもつ“光学四学会連合講演会”は、今回従来と少し運営の方法を変え、“第1回色彩工学コンファレンス”という形で昭和59年11月の20、21日に実行された。

光学四学会連合講演会は、当会のほか色彩学会・写真学会・照明学会が共催でやってきたものである。当初は関連・共通分野での新製品紹介を中心とし、場合によっては簡単な実物展示までがあるような、小さいけれども当時の各学会員にとっては親しみのもてる集りであった。時を経るにつれ、それぞれの学会が発展をしていくにつれ、発足のときは諸事情が変わってきたのであろうか、当初の運営の形からはずれてきた。最近では、各学会から選出されてきた幹事が、その都度テーマを定め、各学会から講演者を出すような方法になっていた。そして、どちらかという、その企画は年々むずかしくなってきた。2日の講演会が1日になり、また連合講演会の存在自身も問題にされるようになってきた。そうなるには幾つかの理由があると思われるが、大体以下のごとくいえるのではなかろうか。

各学会ともにこの30年で会員数も増加してきて、学問・技術の内容もそれに伴い多岐化してきている。そういった事情のところで、全会員が共通に関心をもてるようなテーマを設定することはむずかしくなってきた。一方、四学会に共通な特定テーマがあるとしても、毎年各学会から派遣される幹事はテーマが決まってから選ばれているわけではない。したがって共通のテーマの選定とその内容の検討に適した人員構成にはなっていない。

今回の企画に当たっては、担当幹事が集まって今後の問題として議論をし、多少思い切った方針を考えた。その考え方としては、

- 1) 四学会に共通のテーマであること
- 2) 世の中のニーズがこしばらく継続すること

といった条件を満たすもので、一つのテーマで何年か続けて取り扱うことが有意義なものを採りあげることにした。最初の条件は複合技術対応といってよいだろう。光学に関連する学会であり、一方、四つに分かれていて、

これが連合講演会をしようとしている動機をその立発点まで戻って考えると、それぞれの学会が分担をしているがそれぞれがお互いに補い合うことで総力の発揮できるようなテーマがないかということである。一方、各学会のなかで学問・技術の体系が細かく分かれていることが、あるいは四つの学会に共通の問題を見つけることを困難にしている。第2の条件は、連合で見いだしたテーマを一回限りとせず、ある期間をかけての育成を考えたいということである。そのテーマで何年か続くとすれば、研究の内容も息の長い中で発表の場所を保証されてはげみがつくことになる。また、テーマが決まっていることにより、各学会からの担当幹事もそれに適した専門分野の人が選ばれてくることになる。

そして設定したテーマが“色彩工学”であった。この場合には、各学会でそれぞれの学会の特徴をもった分野分担をしているが共通の問題である。また、最近、とくにOA産業において種々ディスプレイの色彩化が現在開発の立発点にあり、今後数年にわたってますます技術展開の望まれる問題である。以上のような理由から、“色の問題を、その基礎から応用までを含めて総合的に討論する場”としてこれから何年か、光学四学会連合講演会を提供しようということになった。

複合技術としての色彩工学を考えると、それに関連のある学会は光学四学会だけではない。実際の応用という面から考えると、OA機器を中心とした電子、印刷その他、数多くの学会が深い関わりをもっている。その意味でこの色彩の基礎から応用に関しては従来の四学会を共催学会とし、電気学会・電子通信学会・画像電子学会・日本印刷学会・電子写真学会・テレビジョン学会・日本ME学会・レーザー学会・日本デザイン学会・色材協会以上10学会に協賛をお願いすることになり、それぞれご賛同を得ることができた。それぞれの学会の中での取りくみはいろいろであるが、色彩はこれほど数多くの学会で共通の問題なのである。そしてまた、今回協賛をお願いしたところがすべてでもないだろう。

以上のごときテーマの選択と準備の上で、第30回光

学四学会連合講演会は第1回色彩工学コンファレンスとして発展的立発をすることになった。

色彩に関係する科学と技術を、心理・生理を含んだ色覚といった基礎の領域から、表色・測色を経てさらにTV・ソフトハードのディスプレイといった応用、色彩に関連した材料というような周辺技術まで考えてみると、これらを総合して、あるいはある領域をそういった広いなかでの位置にとらえての議論をする場合は現在までなかった。これを具体的に学際的なコンファレンスとしてやって見たいというのが、新しい試みのねらいである。

以上のような趣旨により幹事会から各学会におうかがいを立て、よいとなって企画を進めた。企画の大綱としては、上に述べた基本の考え方のほか、2日間の開催にもどす、各領域で招待講演を6件お願いする、公募論文は28件を目標とする、懇親会・展示会などは考えないなどを討論のうえ定め、公募・プログラム作製といった順序で準備を進めた。この際、招待を別として、28の一般講演については、とくに名指しでお願いすることはあまりしなかったけれども、締め切ったところで目標の28ちょうどになってくれた。残念なことに1件辞退があったが第1回のコンファレンスとしては、最初考えた規模と内容が実現できたと思う。強いていえば、色材に関するセッションがやれなかったこと、環境色彩・配色関係が少なかったことがある。これらは次回以降でよい方向にもっていききたいが、そういった充実をすると会期は3日必要になるだろう。

いずれにしても、コンファレンスを開いてみると、251名の参加と16部の論文集売上げがあり、第1回としては成功だったと考えている。

企画・運営関係の話が多くなってしまったが、会の方針を大きく変えたこともあり、その問題に紙数を使うことになったので、以下内容的なことに触れることにしよう。

第1のセッションは測色であり、これは広く表色・測

色・光源・色彩論応用などを含み、招待講演“光源の顕色性と色の見え”森礼於(東芝総研)ほか11件であった。アンケートで興味があったという項目で3件以上であった講演18件のうち8件までがこのセッションのものであり、実際の応用が盛んである現在でも、基本的な発表に多くの人々が関心をもっているという事実がわかり、コンファレンスのねらいが正しかったと思う。

第2のセッションは配色であり、招待講演“配色”湊幸衛(千葉大)ほか3件であった。この領域はもう少し拡げて大きなセッションにしたいものである。

第3のセッションは色覚であり、招待講演“色覚のメカニズムと色覚異常”安間哲史(名大眼科学)ほか3件であった。この分野は今回のコンファレンスに参加せずとも発表の場所にことかかないと思うが、今後さらに参加を伸ばしていただきたい。

第4は色彩表示であり、招待講演“カラーテレビジョン表色系と色再現”日下秀夫(NHK 技研)ほか6件であった。ソフトディスプレイに関して数多くの仕事が進行している現在、これだけの論文が集まったのは当然であったが、逆にいままで色彩を核にした場に触れるチャンスが少なかったのかベクトル合せの必要な論文も散見したようである。

第5セッションは色彩記録であった。ここでは招待講演“デジタルプリントにおける色再現”小寺宏暉(松下技研)と“写真感材における色再現”高橋公治(富士フィルム)それぞれ印刷・プリント関係5件、写真関係5件の発表があった。今後この分野の発表が盛んになると予想されるが、今回も開発に関係して裏付のある発表が多かった。

今回、内容のバランス、参加者の数、その他いくつかの点で一応及第点をいただけるコンファレンスができたと考える。関係者のいままでのご協力に謝するとともに、今後の発展への助力をお願いして筆を措くことにする。

(1985年2月16日受理)